

北海道、中央高地の鳥

かわべ ももき
1950年砂川に生まれる。
1969年十勝にうつり自然保護に深い関心を持ち、ひがし大雪博物館学芸員となり現在にいる。もっか動物、植物の分布から北海道の自然史にアプローチ中。コンサイス鳥名事典、週刊朝日百科などに執筆。

川辺 百樹

小林桂助氏が一九二九年に中央高地の鳥を調べて以来、多くの人たちが中央高地の鳥を調査してきた。先人たちが積み重ねた情報とこの地における私の一八年の観察から、鳥から見た中央高地がどういうところなのかということについて、日頃考えていることを述べたいと思う。

そのまえに中央高地という、それほど一般的ではない呼び方について説明しておこう。大雪山というとき、十勝岳や然別湖やウベサンケ山までもその範囲に入れる人は、まずいない。ここで私がとりあげる範囲は、これらの地域も含むほぼ大雪山国立公園の全域である。だから「大雪山の鳥」ではピンとこない。さりとて「大雪山国立公園の鳥」では、なんと人間臭い。そこで北海道の中央にあるハイランドにちなんで「北海道、中央高地の鳥」としたしだいである。

記録種数

一九九一年一月五日現在、中央高地からは一九九種の鳥が記録されている。ただし、過去に報告のあるヤマヒバリ、ノジコ、シマセンニュウについては、生息に疑問がもたれるのでこのなかに含めていない。一五九種のうち繁殖記録のあるものと繁殖の可能性の大きいものをあわせると八九種ほどになる。その他のものは非繁殖期を中心に一時的に滞在したものである。なかには、ヤツガシラ、ヤマシヨウビンのような迷行的飛来例もある。まれに記録された種を除き、その滞在時期をみると、種類数は夏季に多く冬季には著しく減少する。このような傾向は、北海道では一般的であるが、この地域の冬季の気候条件の厳しさのため、その傾向はより顕著である。

生息環境と鳥類群集

ある地域の鳥相を分析するには、生息環境ごとに検討するのが有効である。そこで中央高地をいくつかの生息環境に区分し、それぞれの生息環境の鳥類群集の特徴についてみてみよう。

(1) 高山帯

ここでいう高山帯とは高山草原・高山荒原・ハイマツ林など森林限界から上の地帯である。中央高地には北海道で最大規模の広大な高山帯があり、生息する種も多い。主な種として、シロフクロウ、ビンズイ、カヤクグリ、ノゴマ、ハギマシコ、ギンザンマシコ、ホシガラスなどがあげられる。

この鳥類群集は二つの要素からなる。一つはシロフクロウ、カヤクグリ、ハギマシコ、ギンザンマシコのように北海道では、繁殖期に高山帯にのみ生息する種であり、もう一つはビンズイ、ノゴマのように低地でも繁殖する種である。このように、低地の種が高山帯に入り込む現象は、本州中部の高山帯ではみられない。

また、中央高地には、本州中部の高山帯の主要種であるライチョウ、イワヒバリ（イワヒバリは全く生息しないというわけではないが、過去に三回の目撃例があるにすぎない）が生息せず、また逆に本地域に生息するシロフクロウ、ハギマシコ、ギンザンマシコは本州中部の高山帯には生息していない。このように、北海道島と本州島の高山帯の鳥類群集に質的違いがあることは注目される。

(2) 山岳湿原

中央高地には、沼の原、沼の平、原始が原といった山岳湿原がある。湿原の遷移段階などにより、各湿原の植生の構造は異なる。これを反映して鳥類群

集も幾分異なるが、主な生息種はモズ、ビンズイ、ノビタキ、オオシギといったところである。

本州中部の尾瀬では、ホオアカ、ノビタキ、オオシギが湿原の主要種となり、モズやビンズイも生息している（高橋はか一九七八）。このように、ホオアカを除くと両地域には、共通種が多く、前述の高山帯の鳥類群集のようなきわだった違いはみられない。

(3) 針葉樹林

中央高地の森林は、標高八〇〇^{以上}付近から上では落葉性広葉樹が減少し、エゾマツが優占するようになる。ここではこのようなコケモトウヒクラス域のエゾマツトドマツ群集の森林を針葉樹林とする。北海道では低地にもトドマツが生育し、針葉樹と落葉性広葉樹の混生する森林が広く分布するが、エゾマツの優占する森林は、高標高地に多い。中央高地は北海道で最大規模の針葉樹林におおわれるところである。

中央高地の針葉樹林では、北方針葉樹林（タイガ）の鳥であるミユビゲラとキンメフクロウの繁殖が確認されている。両種の繁殖記録は、わが国ではここからだけである。このような北方針葉樹林要素の存在が、中央高地の針葉樹林鳥類群集の大きな特徴である。

本州の亜高山針葉樹林と比較すると、生息種の大部分は共通するが、本州の亜高山針葉樹林の主要種であるメボソムシクイは、この針葉樹林には生息しない（川辺一九八二）。このように、中央高地の針葉樹林鳥類群集は、本州の亜高山針葉樹林と多くの共通要素をもちつつも、やや異質であることに注目したい。

(4) 下部針広混交林

標高四〇〇^{以上}から八〇〇^{以上}にみられる落葉性広葉樹と針葉樹の混生する森林で、中央高地では生息種類数の最も多い生息環境である。北海道の他の地域の針広混交林の鳥類群集との共通性が高い。

(5) 湖沼

中央高地における湖は、然別湖だけであるが、一九五〇年代後半以降に大きな河川の上流部にダムが造られ人造湖が出現した。特に十勝川、音更川には人造湖が多い。これらの湖沼に生息する主な種は、ハクセキレイ、キセキレイ、イソシギ、マガモ、カワアイサ、アオサギ、ミサゴなどである。これらは北海道の他の湖の生息種とはほぼ共通している。また、中央高地の高山部には池塘が点在しているが、マガモ、ユガモなどがときおり飛来する程度である。

(6) 河川

中央高地は石狩川、十勝川といった北海道を代表する大河川の源流域にあたる。したがって、河川形態の上からみると、ほとんど山間溪流である。そのため、生息種はカワガラス、キセキレイ、イソシギ、ヤマセミなど限られる。一部の河川にごく少数ではあるが、シノリガモ、シマフクロウも生息する。今のところ、シノリガモは十勝川上流での繁殖が北海道で唯一の記録であるが、今後北海道各地の山間溪流で繁殖が、確認されるかもしれない。

(7) 人家周辺

温泉旅館を中心に小規模な居住空間や建築物が、森林帯のなかに島状に点在している。繁殖期にこの空間に入り込んでくる種は多くはない。主要なものはイワツバメ、スズメ、ニユウナイスズメ、ハクセキレイである。また、注目されるのは、ジョウビタキが糠平温泉の家屋で繁殖したことである（松田は

か一九八三）。これはわが国における唯一の繁殖例であるが、偶然的要素が強いものと考えられる。

中央高地を特徴づける鳥

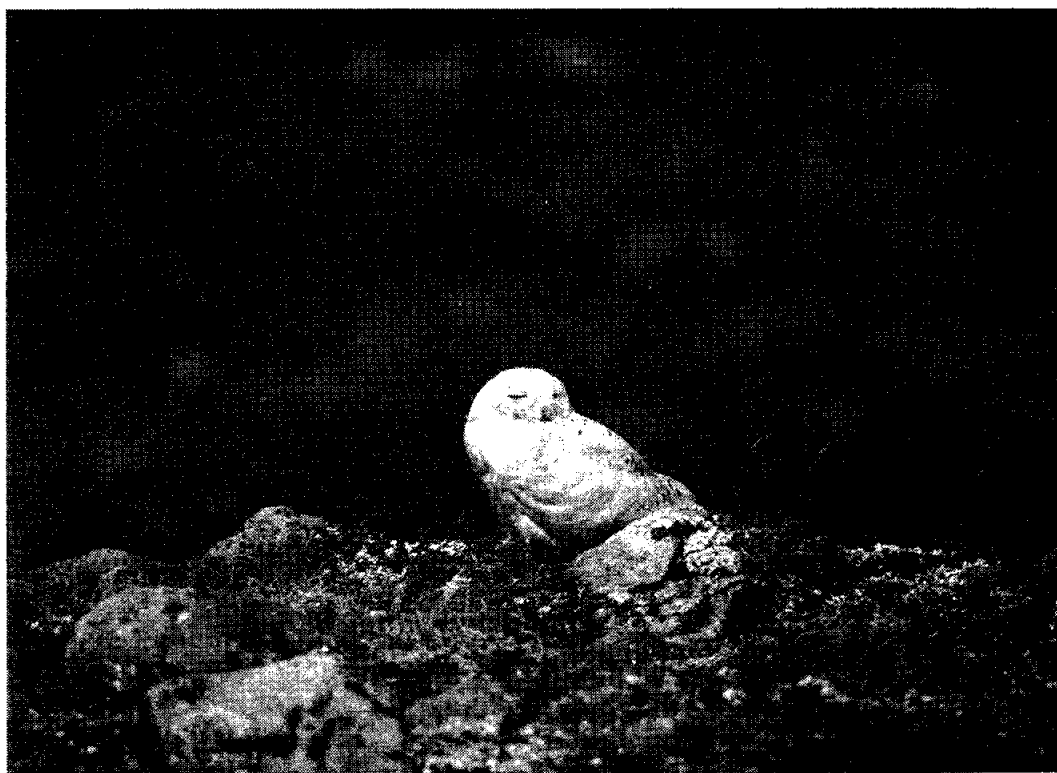
生息環境ごとの鳥類群集の分析から、どんな鳥が中央高地を特徴づけているかが浮び上がってきた。つぎに中央高地を特徴づける鳥たちのプロフィールを紹介しよう。

(1) シロフクロウ

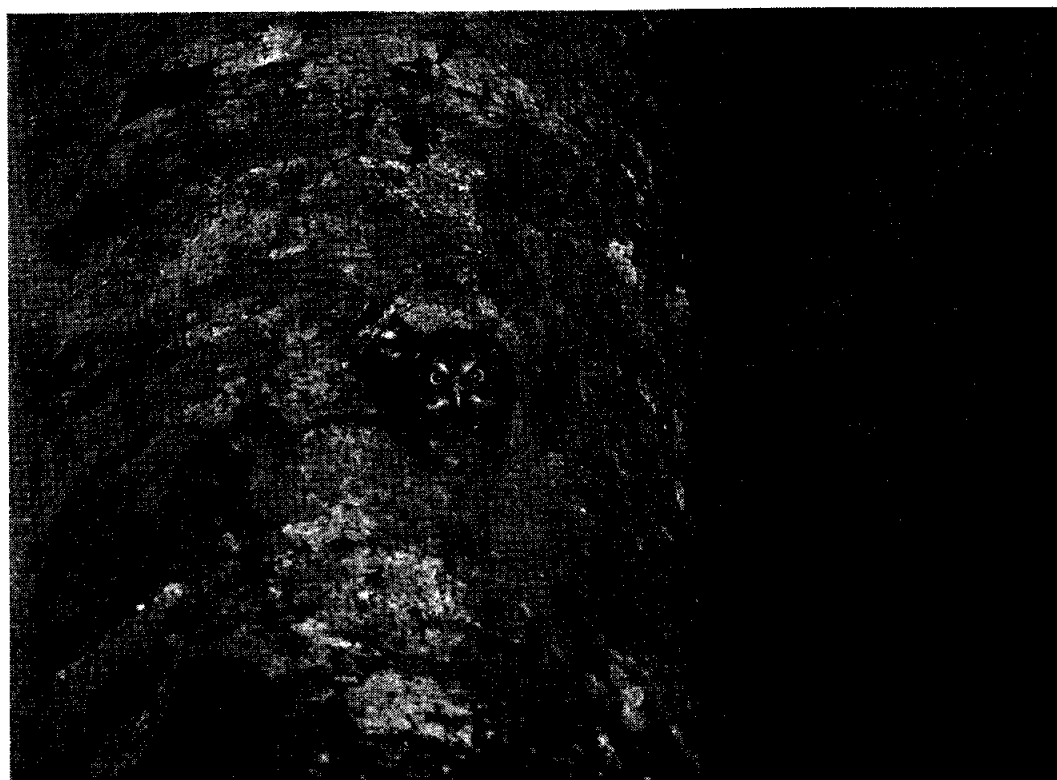
本種の繁殖地は、北極圏であるが、一九八四年にこの高山帯で越冬することが明らかになった（川辺一九八五）。これは、わが国ではじめての例であった。一九八九年にも越冬が確認された。また、滞在期間は不明であるが、一九九〇年も観察された。これらは、いずれも単独個体と考えられた。本種は、高山帯のなかでも特にトムラウシ山近くの岩塊地に集中的に出現した。それは、ここをナキウサギの狩場にしていたためである（川辺一九九一）。

中央高地の高山部には、岩塊地が各所にあり、そこにはほぼ例外なくナキウサギが生息している。岩塊地は巨礫が積重なっているのが一般的である。しかし、こういうところでは岩が妨げとなってシロフクロウは容易にナキウサギを捕獲することができない。トムラウシ山近くの岩塊地は特異で、礫径が小さく平坦で地表に凹凸がない。そのため、ここではシロフクロウは地上に出たナキウサギを容易に捕獲することができるのである。

本種の繁殖の可能性についてであるが、かりに一夫一妻で二羽の雛をもつ家族がナキウサギだけを食糧とすると、ひと夏に約五〇〇頭（七〇kg）のナキウサギが必要となる。わたしのこれまでの観察では、



シロフクロウ 撮影 桧 座 幸 男



キンメフクロウのヒナ 撮影 川 辺 百 樹

前述したようなナキウサギの好適な狩場となる岩塊地は非常に限られており、これほどのナキウサギの確保は困難と思われる。したがって、中央高地における本種の繁殖の可能性は低いといわなければならぬ。

(2) キンメフクロウ

本種はユーラシア大陸および北米大陸の北方針葉樹林と冷温帯山岳針葉樹林で繁殖する小型のフクロウである。一九八六年にわが国ではじめての繁殖が、然別湖付近で確認された。ただこの時は、過度の写真撮影のため抱卵途中で巣を放棄してしまった。一九九〇年にも同じ巣穴で繁殖し、六月一日に三羽の雛が巣立った。巣穴は、トドマツ（胸高直径四四センチ）の地上六・五メートルのところにあるクマゲラの古巣であった。なお、一九九〇年には愛別岳の針葉樹林でも繁殖が確認された。このような事例から、本種が北海道の針葉樹林で広く繁殖しているのではとの期待を抱かせるが、北海道における本種の繁殖地は極く限られると思われる。なぜなら、針葉樹林には営巣適木が非常に限られているためである。また、林床のトガリネズミ類とヤチネズミ類を主に捕食する本種にとって、北海道の針葉樹林の林床に繁茂するササが、狩の妨げになると考えられるからである。

(3) ミユビゲラ

本種は前述のキンメフクロウとはほぼ同様の繁殖分布を示す。わが国での繁殖確認は、一九五六年の上士幌町三股におけるものが唯一である。一九七一年以降記録は途絶えていたが、一九八八年に上士幌町三股の針葉樹林で目撃され、現在もごく少数ながら本種が中央高地に生息していることが明らかになった。なお、川辺（一九九〇）は、本種が中央高地にのみ生息する要因について論じ、本種の生息条件と

してエゾマツの成熟した森林の必要性を指摘している。

(4) ハギマシコ

本種はアルタイ山脈、スタノボイ山脈、カムチャツカ半島、アレウト列島、ロッキー山脈の主峰に高山部で繁殖する。本地域では高根が原以北の荒原状のところであるが、営巣はまだ確認されていない。

(5) ギンザンマシコ

本種は、前述のキンメフクロウ、ミユビゲラとはほぼ同様の繁殖分布を示す。ユーラシア大陸と北米大陸では、北方針葉樹林で繁殖するが、北海道、サハリン、千島、カムチャツカの一部では、ハイマツ林で繁殖する。北海道では、日高山脈、知床半島、利尻島の高山部でも夏季に本種が目撃されているが、ハイマツ林の規模からして中央高地ほど個体数は多くはなく、やや不安定な個体群と考えられる。したがって、北海道における本種の主要な生息地は中央高地とみなしてよいであろう。十勝岳連峰からは繁殖期の記録がわずかしかないが、これは調査が十分行われていないためかもしれない。また、石狩岳以南の山塊では、夏季に一例の記録があるだけだが、これはハイマツ林の規模が、小さいことと関係があるのかもしれない。

鳥からみた中央高地

中央高地の鳥の動物地理学的位置付けを考えるうえで、シロフクロウ、キンメフクロウ、ミユビゲラ、ハギマシコ、ギンザンマシコがとくに注目される鳥であることがおわかりいただけたと思う。彼らは北半球の高緯度に分布の本拠地をもつ鳥たちである。中央高地はそんな彼らの中緯度での飛び地的生息地

となっているのである。このように北半球の高緯度に分布域をもつ鳥が隔離的に分布するところ、それが中央高地である。ここに中央高地の動物地理学上の最大の特徴がある、とわたしは考えている。

これをもう少し大きな視野から見よう。

ユーラシア大陸の東側に花綵にたとえられる島じまが南北に連なっている。そこにはいくつもの動物分布境界線が知られている。本州島と北海道島の間の境界線は、ブラキストン線として有名である。森林性の鳥だけを見ても、ヤマゲラ、エゾライチョウ、ハシブトガラが海峡の南には入っていないし、カケス、エナガは羽色の異なる別々の亜種が海峡をへだてて生息している。このように北海道島の鳥相は本州島にくらべ北の要素が濃い。その北海道島の中央部の高地は、さらに北の要素がはいりこむ「北の島」をなしている。地史的スケールでみるなら、中央高地は北の鳥たちの後氷期の避暑地、あるいはきたるべき氷期への橋頭堡といえるかもしれない。

付記 紙幅の関係で文献は割愛させていただいたが、お知りになりたい方は筆者へ問い合せていただきたい。筆者の中央高地での鳥の調査は多くの人からの情報によって支えられている。とくに檜座幸男、田中康夫の両氏にはいつもお世話になっている。この場をかりてこれらの方々へ厚くお礼申し上げます。